
はないちもんめ

みうら結衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はないちもんめ

【Nコード】

N3773M

【作者名】

みづら結衣

【あらすじ】

東京に住む現代っ子・詩帆と愉快的仲間たちのプチホラーコメディ。

序章

20xx年、東京。

すっかり現代化してしまった今、昔は田舎だったこの街も、デジタルの波に流され洒落た存在となった。

熱いコンクリートの道、交差点を行き交う人々、密集した高い建物。それ等からは未来しか見えないのか、もしくは既に未来など見えないのか。

温暖化を気にして僅かな緑も残されているが、その僅かさが現代人間たちの適当さを物語っている。

白く明るく晴れた朝、まだ学校へ行くまでには余裕のある時間を、部屋の時計が表している。今日は月曜日か…

またキリの無い一週間は幕を開ける。何度も何度も同じつまらない学校生活が。

カーテンを開ければ、窓の下から入り込む電車や車の音。建物の並ぶ景色。

振り返れば、テーブルの上には母からの残業告知メッセージが、冷めたトーストと一緒に置いてあった。

私は、進展が欲しいのだ。決してこの世の中を嫌っているわけでは

ない。

ただ、生き甲斐が欲しい。

未来に夢を見れたなら…。

第一章―とある日常―

「詩帆へ 今日も残業で遅くなりそうです。ゴメンネ 母より」

短い文。走り書きで綴ってある母からの置手紙だ。

その白無地のメモ帳を、私はトーストにかかっていたラップと共にゴミ箱の中へ落とした。

いそいそと朝食を済ませ、着替えて顔を洗い、髪型を整え 計15分。重い瞼に逆らい続け、遅刻は免れた。

校則に適った黒いハイソックスに、白い夏服のセーラー。スニーカーを履いて、重い鞆を肩に掛ける。

自宅のマンションから外の世界へ出れば、それほど眩しく暑い場所はなかった。

人混みと暑さの中、デジタルの街をただひたすら走って、…

スニーカーにブレーキをかけ、駅ビル前。

電車の発車音は自分を安心させた。既に自分は電車の中、幸いなことに腰をかけることまでできた。

白い電車はユラリと動くと、線路を駆ける衝撃音と共に、私を日常へと運ぶ。

時が止まってしまえばいいのに。

そう思いながら駅で買ったレモン水を飲む。微かにそれは涙の様な味をしていた。

そして私は今日も明日も、来週も来年も変わらず、この静寂を感じ続ける。

根拠などないが、今までがそうだったからそうとしか考えられなかった。

「次はー、御代里村ー、御代里村ー……」――

壹、「御代里村」

——「間もなく到着いたします」——

車掌さんのその一声で、揺れる手擦りが視界に映る。

腕時計を確認すると、もう既に8時半過ぎ。初めて寝過ごしてしまった。

どうしよう……と、悩むはずだが、素早くこの結果が脳裏を過る。

とりあえず今日はサボってしまおう。

もう、どうでもいいような気もしてきた。毎日毎日、どうせ変わらない日々を過ごすのなら。

とりあえずお金が…次の駅にでも降りようか。

と、少し一人旅をしているような気分になると、急に心臓が高鳴った。

私は、どこの何という場所かも知らない次の駅で、一旦降りることにした。

…だが、その決断は正しかったのか、間違っていたのかはわからない。

「御代里駅ー、御代里駅ー」

初めて聞く駅名、初めて来る場所。

こんな小さくて貧相そうな所、他に来る人がいるのやら。失礼だが、正直そう思ってしまった。

そう思ったことから、ふと電車内を見渡してみる。

乗っている客は、いつのまにか私一人だけ。

——冒険感が足を浮かせ、電車から降りる。

電車はすぐに扉を閉め、またどこか次の駅へと走っていった。

そこは随分と古ぼけた駅。すべて石づくりの壁には、隅にコケが生えまくり、所々ツタが這う。

しんと静まり返った、冷たい雰囲気の手汗を握らせた。

誰か人はいないかと、焦り焦り、小走りしてみる。

しかし人を探すもなにも、この駅は驚くほど狭かった。その場から見回せば駅内がすべて見えた。

そしてまたおかしいことに、人は一人もいないと。

ひんやりした“何か”の雰囲気は心音となって自分を押しつぶす。

とにかく早くここを出ようと足を進めた。

駅を出ると、足元に広がるのは…

一斉に自分を見上げる、一面の紅葉。

貳、雨宿りの樹

駅から出た詩帆の足元には、鮮やかな紅葉が広がっていた。まるでレッドカーペットで招待でもされているかのようにだった。

その下にはちらちらと、石畳が敷いてあるのが見える。

この辺は、しばらく掃除をされていないのだろうか。

それにしても、おかしいところがひとつ。今は秋ではないこと。

季節はまだ夏、さすがに7月では秋とは分類されない。

不思議に思っていると、スクールバッグを持つ手の甲に、一粒の水滴があたった。

——…雨？

無論、傘などは持ち合わせていない。

次第に強まる雨の勢いは、少しずつ紅葉たちを濡らしていく。

バッグを頭に乗せ抑えると、詩帆は石畳の上を小走りした。

右にも左にも道が別れないので、とにかく先へ先へと続く紅葉のカーペット、その一本道を駆ける。

周りには木があるが、それは背の低いものなので、とても雨宿りにはならない。

頭上を見れば空は灰色に覆われ、今にも土砂降りがやってきそうな風だ。

何分か普通のペースで進んだが、そろそろ少し疲れが見えてくる。

そのタイミングで、ちょうど雨を凌ぐのに良さそうな大きな樹が一本。

詩帆は助けを求めるように、その樹の下まで行くことにした。

暗雲の天候で、蒸し暑さが絶えない午前中。ああ、なんだかもう東京へ帰りたい。

こんなことなら、大人しく家に帰るべきだったかもしれない。こんな変な所で降りたのは、やはり間違っていたか。

駅で感じた寒気、この雨による不安、蒸し暑さ。それ等は詩帆の思考回路を空回らせた。

しかし、どう自分を攻めてもここまで来てしまうと、また駅まで戻るのも嫌になってくる。

だれか村の人いないかな…と

どこかに安心させてくれるものがあることを、ただ少し望んで。

参、もみじと神社

—— かき分けても、かき分けても、雑草や枝が視界を遮る。

この道という道もない場所を進み続けて、かれこれ何分たったのだろうか。

「何で私、こんな村で電車降りちゃったかな…」

雨水と共に、そんな後悔が心に滲んだ。

タメ息混じりに俯けば、足元の紅葉はまだ先へと続いている。差ほど気にはならなかったのだが…

天候は小雨となり、少しの風が吹き始める。

やがて詩帆の足は、最後まで続いていた紅葉の上でぴたりと止まった。

見上げれば、古ぼけた大木がこちらを見下げていた。

風に揺られ、雨に濡れ、今にも枯れそうなその樹の葉の色は紅。

まるで人の手のような形をした葉は、紅一色に染まっていた。

次に詩帆は、この樹が紅葉のレッドカーペットで自分を招待していた、張本人だったことを知る。

紅い樹の美しさに、詩帆は雨宿りすることを忘れ、呆然と立ち尽くした。

…が、ハッともう一つの事に気づく。

樹の裏に、ぼつんと存在していた、小さな鳥居。

背丈は樹より低く、しかし樹と同じ美しい色をしていた。

所々サビたり、色が剥けているのだが、その独特の雰囲気、身体が自然と引き寄せられていた…。

第二章 ―才稻荷サン―

紅い紅いもみじの葉が、風に巻き上げられながら、セーラー服の背中を押す。

自然と押されるがままに神社に近づき、呆然と立ち尽くす女子高生。身体が固まり、何故かそこから動く気がなくなった。

風は冷たく、北から滑り込んで詩帆の足を抑えつけた。

遠くから微かに人の声が聞こえる。村の人かと周囲を見渡す。

――来る！

“何か”の気配が近づいている。濃い威圧感が詩帆を包んだ。

そして視界の淵に、黒い霧が被さり、…

やがて黒い霧は、目の前を黒く黒く、塞いだ――。

「愚かな小娘め！勝手に我の村に上がり込むなどは。ひゃひゃひゃ」

甲高い陽気な笑い声が、超音波の如く響き渡る村。

その声を一番近くで聞いていたはずだったのは、セーラー服の女子高生。

そう、一番近くで聞いていた、はずだった。

意識さえ飛んでいなければ。

「ひゃひゃひゃひゃひゃ……」

四、疑問と謎

「お嬢さん、しっかりして！」

視界にゆっくりと光が射し込んだ。

細く眼を開くと、そこに見えたのは焦げ茶色の天井と、綺麗な顔立ちをした女性。

女性は全く見知らぬ顔だが、自分のことを何故か心配そうに見つめていた。

「あつ、目が覚めた！よかった、死んでしまっていたらどうしようかと」

女性は私に向かって柔らかい微笑みを浮かべ、安心したように床にへなれた。

落ち着いた印象の、朗らかな人。明らかに危険な人物ではなさそうだ。

その優しそうな女性の表情に、自然と自分まで安心していた。

と共に、回転を再開する脳からは、次々と疑問が浮かんできた。

自分は何故ここにいる？神社の前にいたはずだ。

ここに来る前に、一瞬黒い霧を見た。あれは何？

私はどうにかなくなってしまったのだろうか？

「私、針山^{はりやま}雨乃。お嬢さん、この村のことを知らずに此処へ来たでしょう」

ズバリ当てられて私は戸惑った。が、今は冷静に女性の話を聞くことにした。

「図星ね。まあ、知ってたら絶対にこんな村には近づかないものね」

初めて遭った村人の雨乃さん。

そのクスツと生温かい笑みのせいで、また疑問がひとつ増える。

伍、狐の説

雨乃さんは物腰柔らかく、それでいて真剣に言った。

何も知らないままでは、この村にいるのは危険だと。

すると、部屋の棚からある本を取り出し、私に見せた。

表紙には 御代里村狐之説 とある。随分昔のものようだ、ホコリがすごく色も褪せている。

「…最後まで1ページも飛ばさずに読んで」

雨乃さんのあまりに真剣な表情に、無言でページをめくってみた。

—— 第一ノ説 ——

緑豊かな御代里村、此处に在り。

男はよく働き、女は御子を沢山産め。汝と村の、幸福に恵まれん。

—— 第二ノ説 ——

緑儂き御代里村、此处に在り。

男は勤労に餓え、女は食に餓えり。汝と村に、異変が起こらん。

—— 第三ノ説 ——

緑枯れ果て御代里村、此处に在り。

男は愛を求め戦い、女は神社へ奉神に参れ。汝と村は、狐の呪に縛られん。

そこで気づく。「第三ノ説」から先のページが、ずっと白紙のままの状態。

ページをめくっても、めくっても先が無い。そこから歴史が途絶えているのだ。

「御代里村狐之説 は、その悲しいエピソードで終わってるの。」

「つまり今現在でも、その状態が続いているということよ」

《汝と村は、狐の呪に縛られん》

もう一度、私はその一文を読み返す。

この村は——…大昔から、狐に呪縛されていた。

狐は詩帆と同じ年くらいの男子の姿に変化した。頭の上からはベタな紅葉の葉が煙で舞い落ちた。

が、狐の仮面をしていて、顔が見えない。

「我は紅葉 狐と申す。知っておるであろうが、この村の長だ」

「あなた、あの太古から存在する呪いの狐なのでしょう。化けても中身は変わらない」

男子高生（の姿をした狐）の綺麗な声に、きょとんとした顔で言う雨乃。

「その通り。我は何千年も昔から存在する。本当の話、これは元の姿なのだが」

爽やかな少年声に似合わない、堅苦しい喋り方。

「教えて長様、これは如何なることか？」

雨乃の冷静さは、その場で誰かが見ていれば、余程信じがたいものだった。

第三章 ― 愉快な惨劇 ―

雨乃は冷静に、狐への…眼の前の男子への疑問を呟く。

一方、眼の前の女性をじっと見る狐は、仮面の下で微笑していた。

と、狐の鼻がぴくりと反応し…

「お前、木と金と…錆のにおいもする。何奴だ」

狐の些細な不信感を踏み消し、雨乃は目つきをより鋭くした。

「女性に向かって錆とは失礼極まりございません、長様」

優しく紳土的、それでいて強気な狐の指が、雨乃の顎を上げる。

狐の仮面に学ランという謎の少年に顔を近づけられるも、雨乃の表情は絶えず凍りついていた。

「…気安く私に触るでない、この薄汚い化物めが」

ようやくか、というように狐はひとつ息を吐いた。

呆れたのか疲れたのか、ぼそりと呟かれた狐の言葉。

「お前が巫女だった過去を持つことは、初めから承知しておる」

七、昼下がり

「詩帆、来ないね」

詠鍵^{よみかぎ}学園高校、2・2教室にて。昼休みを終え、校内に予鈴が鳴り響く。

「もうこんな時間だし、休みかサボリでしょう」

眠たげな女子と俯く女子が、廊下を歩きながら話していた。

「まあさすがに遅すぎるか。でも詩帆がサボるなんて初めてだね」

「休みたい時くらい誰だってあるものね」

眠気に耐え、ぐっと伸びをする女子に対し、もう片方の女子は憂いた顔でこくりと頷く。

詩帆のことを心配していたのだ。

詩帆の周りからのイメージといえば、“努力家で優しい人”だった。

この二人の女子は、詩帆の友人である。

詩帆には世話になっていた二人だが、それ故に詩帆には信頼感を抱いていた。

その日の二人は、結局詩帆はサボりだと認識し、2 - 2の五時間目がいつも通り始まる。

……、……、……。

——「やっぱり、放っておくなんて気が気じゃないよ」

そう思って、授業中こっそり詩帆にメールを送ったのは…

先程から詩帆のことを気にかけている女子、かんさきりょうこ神崎 涼子だった。

釵、縁切り

古ぼけた家の中、雨乃はある紙切れを口に咥え、左手で魔除けの印を床に描いた。

雨乃の描いた印からは、青い炎が噴き出している。

「黙りなさい。あなたとの縁は巫女を辞めた日に切っている」

狐はやれやれというように首を横に振る。

と、雨乃の出した青い炎を、蠟燭の火の如く息で消し去ってみせた。

火の跡ひとつなくなった印。

仮面の下から息を吹きかけた狐に眼を丸くし、雨乃は悔しさでもう一度相手を睨みつけた。

狐は元の姿になると、詩帆の中へ戻っていった。

ひゃひゃひゃ…ひゃ……。

綺麗な声は甲高く、女子高生と一体化する。

吸い込まれるように小さくなり、やがて声は消え失せた。

仇、目覚める娘

雨乃が下を俯いて何かを考えていると、後ろで人影がゆらりと動いた。

反射的に振り返れば、人影は首を回し疲れたような表情を見せる。

詩帆だ。セーラー服を雨でしわくちゃに汚した女子高生。

意識をしっかりとさせた詩帆は、キョロキョロと部屋に視線を走らせ、雨乃に気づいて言葉を紡ごうとする。

しかし寝ぼけているといった感じで、詩帆はうまく言葉が出てこなかった。

——すべてを知り、確信し…それを詩帆に伝えなければならない。

雨乃は解っていた。

しかし、高校生とはいえまだ子供の詩帆に馬鹿らしいことを言う勇氣が出なかったのだ。

「あなたの身体に今、狐が入っています」などと。

詩帆が寝ぼけているうちに、ぶつぶつと考えていた雨乃だが…

——気づいた。

村人は沢山いるのに、なぜ詩帆だけが狐に身体を乗っ取られたのか。

誰も近づこうとはしない狐の住み家・神社に、ただ一人だけ立ち寄ってしまった娘。

つまり恐らく、紅葉 狐という 一人の少年が——

「お嬢さんにご執心なのね、この変態妖狐。」

雨乃のそんな呟きは、まだ眠そうな詩帆には聞こえていなかった。

第四章 ―霧と双子と―

「わっ」

高い声がしんとした部屋の中に飛ぶ。

その理由に、綺麗な黒髪の女性が詩帆の頬に冷たい缶を当てていた。女性が手渡す冷えた飲み物。レトロなオレンジ色の缶…コーヒーのようだ。

「そろそろ眠気、覚めたかしら」

女性は微笑みながら、淑やかに傍に座った。

「それ飲み終わったら、村の人達を紹介してあげる。面白い所だから、のんびり寛いで行くといいわ」

雨乃は柔らかくそう言ったが、実際この村でゆっくりしていくかどうか…などという意思は関係ない。

詩帆は結局、ここに長居しなければいけない状況なのだ。

身体から、狐の魂を引き離すまでは…。

十、奥の霧から

カランと儚い音を立ててコーヒーの缶が捨てられた。

立ち上がり、家の外へと招く雨乃を見て、詩帆は無言でついて行った。

引き戸の玄関を開け外に出ると、少し肌寒い霧が出ている。

この頃、空は夕暮れに染められる時刻だった。

雨乃がまた、優しく微笑みながら言う。

「この霧はね、天候のせいでも何でもないのよ。じきに解るわ」

その言葉で、気にしていなかったつもりの事が逆に疑問になった。

.....どん.....しゃん.....

どんちゃん...どんちゃん...どんからしゃん。

どんちゃん、どんちゃん、どんからしゃん！

遠くから子供の声と、太鼓や笛の賑やかな音がしてきた。

それらは徐々に詩帆と雨乃に近づき、やがて霧の中より姿を現した。

「アサギリ姉妹よ。この村の名物の饅頭を売りまわってる双子」

雨乃は詩帆に明るいついでで応え、大声を出して「アサギリ姉妹」を呼んだ。

「はいはい、針山の姉さんでつかー？」

樹海の中の霧の奥、まったく同じような声と影がふたつ。

太鼓や笛の音が止み、カラカラと下駄で走る足音と変わって、影はよりこちらにやってくる。

その声はとても幼く…小学生を思わせた。

十巻、お饅頭

「まいどおおきに、アサギリ姉妹やで！」

やはり、同じ声がふたつ重なっている。どちらも幼く高い声をしている。

そしてその声は、いま詩帆の目の前で発信されている。

御代里名物・どんちゃん屋饅頭 というプレートに、首から饅頭の入った箱をさげてそこに立つ。

雨乃はこの場に広がる濃い霧の理由を「この2人が近くにいると、何故か霧が出てくるの。不思議現象よ」と耳打ちで説明すると、普通に饅頭をふたつ頼んだ。

しかし、揃った声は詩帆に突然話しかけてきた。

見ない顔だ、とずいずい押し寄せる好奇心の顔に、とっさに声をだした。

「ひ、日向 詩帆です。東京から来ました」

敬語もなぜかとっさに出た。

詩帆の一言を聞いたアサギリ姉妹は、きゃあきゃああと騒ぎ出す。都会者は珍しいと。

ぺらぺら、けらけらと、賑やかに喋繰る双子の姉妹。大阪なまりなのが不思議だが、とても良い子そうだ。

自分より明らかに年下…小4くらいの子供。話を聞いても外見を見ても、癒しの存在だった。

「「おっと、ウチらの紹介がまだやったな」」

二人とも前に出ると、姉の瑠子が饅頭をふたつ詩帆に手渡した。

「ウチら、家ではずっと饅頭作つとる。針山の姉さんが案内してくれはるやるから、いつでも遊びに来なはれや」

少し照れたような上目づかいと小声が、詩帆の疲れを解した。子犬を見るような輝いた目で、詩帆はこくりと頷く。

学校をサボって電車旅、見知らぬ村で知り合いが増えた。

隣では雨乃が「また人任せにして」と笑っている。

呪縛されたこの村で詩帆を待っていたのは、穏やかな新しい出会いとも言えた。

十式、次の道に行く

名物饅頭を2つ買っと、アサギリ姉妹は賑やかな音を立て、またどこかへと饅頭を売りに行く。

少し前まで妙な寒気が立っていた自分だが、今はもう自然と笑顔になれるほど肩にゆとりがあった。

やがて姉妹が霧で見えなくなると、雨乃は悪戯な白い歯を見せて言う。

「いきなりだけど、これから先の道は険しいわよ。手を貸してあげるけど、気をつけてね」

その場所は林に囲まれていて、雨乃の家しか見えなかった。

遠くに見えるといえば、——怪しげな高い建物。

まるでディズニールランドでシンデレラ城を遠くから見ているかのよう、くつきりと聳え立つ屋敷が林の向こうに見えていた。

険しい道とは言われたものの、この覆うような林のどこかに道があると言うのか？

黙って、雨乃の行く方へと足を進めた。

…しかしやはり道はない。

駅前の石畳に広がっていた海のような紅葉も、この辺には全く無いようだ。

道標も何もない、深い深い林の中を、雨乃の後ろから無理矢理ついて歩く。

空は曇り、木漏れ日なども感じられないので、薄気味の悪い場所だった。

さらに樹の根が地面にむき出しになっている。樹とともに歩いている幻覚を思わせる、不思議な空間。

雨乃が無言でいたので、こっちからふる話題もないと思い自分も無言で歩き続けた。

何分歩いていたのだろう、言葉が無かったせいかすごく時間が長かったように感じられた。

やがて林の中を抜け、解放されたマイナスイオンの世界へと出た。

…と思えば、そこから見えた景色は——ドロ沼と化した、湖だった。

十参、泥湖橋

森林から出て辿り着いた、へどろの溜まった地。

その中には樹枝や自転車・靴など訳のありそうなごみがぐちゃぐちゃと落ちていた。

ももとは綺麗な湖だったのだと、雨乃は瞼を閉じながら云い、軽く息を吐いた。

少し漂う異臭が気になった。が、何を聞いても「私にも分からない」と返され、結局この地については何も解らなかった。

「でもこれだけは知ってるわ。この湖、いつの間にかこうなったから、みんな“泥湖”^{でいこ}って呼ぶようになったの」

…いつの間にか、こうなっていた…？

今の雨乃の言うことには、村人が皆、この湖がこうなった訳を知らないということになる。

雨乃はこれ以上話そうとしたことを躊躇うと、進むべき“道”である方を指差した。

その先にあったのは、古く腐った木の吊り橋。

千切れそうな綱や橋に生えたコケが、なんともベタな風景だ。

自らを先頭に橋へと踏み出した雨乃は、後から続く私の足取りを心配し、手を支えていてくれた。

足を乗せる度にギィギィと嫌な音を立てる橋からは、寿命のきていた木の欠片が崩れ落ちる。

怯えきつた私は、無意識にかかとを浮かせ、足先のみで橋を渡った。長く続くその恐怖は、雨乃の言った通りまさに険しい道だった。

——すっかり足に力が入ってしまっていたが、ようやく吊り橋を渡りきった。

ひと息ついて前を見れば、そこからはちゃんとした道という道が続いていた。

少し疲れたというように冷や汗を拭う雨乃は、安心した私にまたニコツと微笑む。

よく渡りきったわと、肩にポンと手を置き。

その手により私に貼り巡っていた緊張感が一瞬でほどけ、次の道へ進む元気が湧いてくる。

凜と立ち、前方に一本道。私は雨乃の横を再び歩き始めた。

雨乃がぽつりと呟く、意味深な言葉にも気づかず。

「…本当に、泥湖橋を渡りきってしまうなんて……。」

十四、安心からの不安

その先には道という道が続いている。

だが、まだ建物どころか人の一人も見当たらなかった。

「結構道程が長いですね…あれ？」

疲れをちらつかせている自身の足。雨乃に振り返り口を開いた。

しかしその言葉を聞いていたのは、吹き抜ける風のみだった。

視界には渡ってきた吊り橋と、自分を見上げるへどろの湖。

一人ぼっちであるという確信に、不安が灰色の霧となって頬の傍を横切る。

不思議と気味が悪くなり、その感じがぐるぐると心臓を取り囲む。

「雨乃さん…？」

—— 此处に居ては危ない、先を急げ ——

刹那、少年らしき声が響いた。

あまりにもすぐ傍で話しかけられているように感じたが、そこには確かに誰もいない。

「誰…どこにいるの…」

小さく声を出したが人の気配はなく、それからその少年らしき声も聞こえなかった。

訳が解らなくなり、微かに痛み始める頭を押さえる。

さっきまでそこにいた雨乃はどこへ消えてしまったのか。

いきなり自分に話しかけてきた声は何だったのか。

もやもやと謎を考え込み、一人。足の疲れにその場にあった木の陰にうずくまっていた。

雨乃に村を案内してもらうはずが、肝心の案内人がはたりと消えてしまっただけ、どうにも進みようがない。

困り果てていると、足元にひらりと何かが舞い降りてきた。

見ると——虫食いもなく真っ紅に染まった、一枚の紅葉の葉だった。

「何で…？この辺、紅葉の樹なんか見当たらないけど…」

おそらく、小さな崖から落ちたのだと思われる。

思わずあげた叫び声は、やがて別の地に落ちた衝撃によって止められた。

茂った緑色の中に尻もちをついてしまい、痛みに唸る。

それだけではない。セーラー服はすっかり泥まみれ、髪もぐしゃぐしゃ。身体中には痛み。

何が何やら全く判断のつかなくなった詩帆は、不思議を通り越した諦めのような気持ちになり、ため息をついた。

…もう、どうにでもなれ……

そう思って目を瞑ったとき、先程とは違う、明るい少年の声がした。

「大丈夫？」

目を開け、見上げた先に視界に映ったのは、こちらを心配そうに見る茶髪の少年。

学生服だがその下に洒落たＴシャツを着ている。これを見るかぎり、少年は自分と同じ年くらいだと確信した。

怪しさも穢れもなく純粹で、しかし少しチャラとした姿。その後ろには…

快晴の、青空が広がっていた。

（あれ…さっきまでの灰色の霧は？空も曇ってたのに…）

「こんな所でどうしたの？…立てる？」

不思議な事態ばかりが詩帆を襲う中、洒落た少年は、優しく手を差し出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3773m/>

はないちもんめ

2010年10月23日13時19分発行